

授業科目	音響学	担当教員	松山 大輔		
対象年次・学期	1 年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	音の性質を学び、言語聴覚士として理解すべき音響学を学ぶ。				
到達目標	音の物理量を求め物理現象を説明できる。サウンドスペクトログラムの読み取りができる。				
テキスト・参考図書等	教) Crosslink 言語聴覚療法テキスト 音響・音声学 編集；竹内京子、稲田朋晃 メディカルビュー社 参) ゼロからはじめる音響学 著者名：青木 直史 発行所：KS 理工学専門書 言語聴覚士の音響学入門 著者名：吉田 友敬 発行所：海文堂				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験で評価する。		
	レポート	0			
	小テスト				
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	数学的知識を用いるため、小数点計算、グラフの読み取りができるように。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	音響学とは	サウンドスペクトログラム・リハビリとの関連		
	2	音波の基本的性質	波長、周期、周波数、振幅、位相		
	3	スペクトル			
	4	共鳴			
	5	音源フィルタ理論			
	6	母音と子音			
	7	デジタル処理			
	8	聴覚閾値、可聴範囲			
	9	ラウドネス			
	10	音の高さ			
	11	マスキング			
	12	聴こえ			
	13	環境と聴覚			
	14	国家試験問題	グループワーク		
15	ST としての音響学の利用 ～ふりかえり～				

[illegible]

授業科目	解剖学		担当教員	飯島 治之	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	人体の構造と機能を理解することは医学を学ぶための基礎である。 言語聴覚にかかわる分野だけでなく、全身を広く学び、からだ全体のつながりを知ることが目的である。				
到達目標	・全身の骨・関節・靱帯・筋およびその詳細について学習し、基礎的知識を身につける。 ・基本的な解剖学の名称と各器官の関連性、および人体に於ける 3 次元的な位置関係について理解する。				
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士のための解剖・生理学 著者名：小林靖 発行所：医歯薬出版 (教) ナースのための解剖生理ポケットブック 著者名：飯島治之 発行所：技術論評社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	学習内容が広範に渡る上に授業進度がはやいので、しっかり復習すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	解剖学の概要	解剖学とは、人体の構成		
	2	運動器系	骨の構造、全身の骨格、筋の構造、全身の筋		
	3	運動器系	骨の構造、全身の骨格、筋の構造、全身の筋		
	4	循環器系	心臓と血管、リンパ系		
	5	循環器系	心臓と血管、リンパ系		
	6	呼吸器系	気道と肺、胸腔		
	7	呼吸器系	気道と肺、胸腔		
	8	消化器系	消化管と消化腺、腹腔と腹膜		
	9	泌尿生殖器系	腎臓と尿路、男子生殖器、女性生殖器		
	10	神経系Ⅰ	中枢神経系（脳と脊髄）		
	11	神経系Ⅰ	中枢神経系（脳と脊髄）		
	12	神経系Ⅱ	末梢神経系（体性神経と自律神経）		
	13	内分泌系	内分泌線とホルモン		
	14	感覚器系	視覚器、聴覚器、その他の感覚		
15	感覚器系	視覚器、聴覚器、その他の感覚			

[illegible]

授業科目	教育学	担当教員	菅原 和良		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数		時間数	
授業目的	教育の方法と基礎的理論及び実践について学ぶとともに、教育の技術や教材等の活用と理解を図る。				
到達目標	・社会の状況を理解し、その変化が学校教育にもたらす影響とそこから生じる課題並びにそれに対応するための教育施策の動向を理解する。 ・学校教育を媒介とし、社会教育や家庭教育、職場における人間関係や協働的な関わりについて考察し、家庭や社会におけるリーダーシップの発揮の仕方やよりよき支援者としての資質・能力を育む。 ・講義を理解しながら自分で考え、発表し、積極的に授業参加して課題解決について考えることを通し、柔軟な思考や視点、社会の一員としての教育への関わり方などの態度や方法を身に付ける。				
テキスト・参考図書等	(教) 教育の方法と技術				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	授業では原則毎回課題発表を行うことから、個人の発表に対する取組やプレゼン、ディスカッション、グループ協議などの演習を試験と同等に評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	50			
履修上の留意事項	1.学生としての授業規律と積極的な授業参加を期待する。 2.病欠、諸事情で欠席の場合は事務担当者に必ず連絡すること。 3.コミュニケーションスキルを（挨拶・対話等）を身に付ける。4.授業への主体的・協働的参加を期待する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	資質・能力を基盤とした学力論と教育の方法・技術	資質・能力を基盤とした学力論		
	2	学習理論から見た主体的・対話的で深い学びの実現	質・能力が兼ね備えるべき汎用性について		
	3	子どもの学びをよりよく支えるための教育評価	目指す子どもの姿に基づく評価の計画と実施		
	4	公教育を担う教師の創造性	新しい学力観の登場と資質・能力		
	5	学習指導と単元の構成	学習指導と「深い学び」		
	6	授業の構成と学習指導案	学習指導案に書くべき諸要素とその関係		
	7	個に応じた指導（個別最適な学び）と環境による教育	個に応じた指導（個別最適な学び）と環境による教育		
	8	身近な防災教育	いざという時慌てないために		
	9	成長する社会の教育	量的拡大から質的拡大へ		
	10	問われる学校の価値	問い直される日本型学校教育		
	11	学力と能力の教育論争	教育格差と資質・能力		
	12	学校と地域との関わり	少子化とチーム学校		
	13	ジェンダーとセクシュアリティに係る教育の役割	多様性を尊重する社会		
	14	情報活用能力を育成するための指導法	情報活用能力も理解と指導について		
	15	これからの教育が目指すもの	これまでの学習の総括		

[illegible]

授業科目	現代表現		担当教員	秋田 松年	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数		時間数
授業目的	「漢字の読み書き、意見文等の書き方及び敬語の使用法」などの基礎・基本を習得させることにより、社会人として必要な常識などを身に付けさせる。				
到達目標	社会人として求められる漢字の読み書き、慣用句、敬語の使い方、文章の書き方（意見文・レポート・お礼文）等が身に付くようになる。				
テキスト・参考図書等	毎時間配布する資料に基づいて授業を行います。				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験、発表（発言力）、小テスト、提出物、発表等を総合して評価する。		
	レポート	10			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	10			
履修上の留意事項	将来を見通して、言葉遣い等の基礎・常識・知識等を身につけるための授業です。皆さんが将来、接する人たちに対してどのように対応していくべきかを考えながら、常に新たな気持ちで毎回、出席をすることです。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション	講義内容概説、語彙力、文章力をつける 1、2 等		
	2	文章の基礎 1	語彙力、文章力をつける 3、4 等		
	3	文章の基礎 2	語彙力、文章力をつける 5、6 等		
	4	文章の基礎 3	語彙力、文章力をつける 7、8 等		
	5	文章の基礎 4	語彙力、文章力をつける 9、10 等		
	6	文章の基礎 5	文の乱れ、文体の統一、話し言葉・書き言葉の違い等 11、12 等		
	7	文章の基礎 6	要約の仕方とその実際等		
	8	文章の基礎 7	意見文、レポートの書き方等		
	9	文章の基礎 8	敬語表現 1		
	10	文章の基礎 9	敬語表現 2		
	11	文章の基礎 10	敬語表現 3		
	12	文章の基礎 11	敬語表現 4		
	13	文章の基礎 12	敬語表現 5		
	14	文章の基礎 13	手紙の形式とマナー		
	15	文章の基礎 14	手紙の形式とお礼文の書き方、授業のまとめ等		

[illegible]

授業科目	言語発達学		担当教員	箭本 尚子	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	言語発達の概要を、発達段階や言語機能の諸側面および各機能との関連の観点から学習し、子どもを評価・支援する際に必要な言語発達の基礎知識を得ることを目的とする。				
到達目標	1) 前言語期、幼児期前期、幼児期後期、学童期の各段階の言語発達を理解する。 2) 言語発達を説明する各理論を理解する。				
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士テキスト第 4 版 編者名：大森孝一、他 発行所：医歯薬出版株式会社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	定期試験・提出物の結果を合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	10			
	その他	0			
履修上の留意事項	・欠席せず、復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	言語発達を説明する理論	オリエンテーション、生得説、学習説、認知説、社会・相互交渉説		
	2	言語発達の基盤・前言語期の発達①	言語発達の 3 つの基盤について、音声知覚能力の発達		
	3	前言語期の発達②	発声行動の発達		
	4	前言語期の発達③	コミュニケーション行動の発達		
	5	前言語期の発達	認知機能の発達		
	6	前言語期のまとめ	前言語期の言語発達の振り返り		
	7	幼児期の発達①	初語の出現と語彙の増加、言語発達を促す大人の関わり		
	8	幼児期の発達②	語彙・構文の発達		
	9	幼児期の発達③	談話能力の発達		
	10	幼児期の発達④	音韻意識の発達		
	11	幼児期のまとめ	幼児期の言語発達の振り返り		
	12	学童期の発達①	読み書き能力の発達		
	13	学童期の発達②	語彙・構文の発達		
	14	学童期の発達③	談話能力の発達		
	15	学童期のまとめ	学童期の振り返り		

[illegible]

授業科目	心理学	担当教員	高橋 陸斗		
対象年次・学期	1 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数		時間数	
授業目的	言語聴覚士国家試験の出題範囲である心理学における土台となる心理学を学び、基礎知識の理解を深める。				
到達目標	1 心理学とはどのような学問なのかを理解し、説明することができる。 2 心を理解するための科学的な方法について理解し、説明することができる。 3 心と行動をつなぐ生理的基盤の基礎知識について理解し、説明することができる。 4 基礎科学的な心理学と応用的な心理学の違いを理解し、説明することができる。				
テキスト・参考図書等	教科書： 言語聴覚士のための心理学 第2版 山田弘幸・編 医歯薬出版 参考図書：心理学第5版（東京大学出版会） 配布資料：授業ごとに配布予定				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験で評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	テキストと配布資料をもとに以下のスケジュールで授業を進めが、全体の進行状態に応じてスケジュール等を変更する場合もある。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	心理学とは	授業のガイダンス、心理学の歴史		
	2	学習 1	学習の理論、環境に合わせて変化する行動		
	3	学習 2/記憶 1	技術を習得するプロセスと記憶の種類		
	4	記憶 2	忘れてしまう要因、どうしたら記憶力が良くなるのか		
	5	発達心理学 1	言語・認知の発達＜乳児期・幼児期の発達＞		
	6	発達心理学 2	他者の考えを理解し生きること＜児童期以降の発達＞		
	7	パーソナリティ	性格を理解しアセスメントするには		
	8	発達障害	発達障害について考える－ 障害をどのように捉えるか		
	9	心理療法	心理的な問題にどのように介入するか		
	10	感覚	情報を受け取るとはどういうことなのか		
	11	知覚・認知	情報をどのように捉えているのか		
	12	思考・知識と言語	概念とコミュニケーションの獲得		
	13	心理学測定法	心理的なデータを集める方法		
	14	心理支援体制	当事者の困りや悩みをどう理解するか		
	15	まとめ	講義全体を通したまとめ		

[illegible]

授業科目	生理学		担当教員	鈴木 裕子	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	医療人として土台となる体の構造や機能について学ぶ。				
到達目標	言語聴覚士の専門性の基本となる人体各部位の機能と働きについて理解し、医学的基礎知識を身につける。				
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士のための解剖生理学 著者名：小林靖 発行所：医歯薬出版 (参) 人体の構造と機能 著者名：内田さえ、佐伯由香、原田玲子 発行所：医歯薬出版 シンプル解剖生理学 著者名：河田光博、樋口隆 発行所：南江堂				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	定期試験と小テスト・提出物を合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	5			
	提出物	5			
	その他	0			
履修上の留意事項	生理学は臨床につながる重要な基礎科目です。常に復習を行うこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	からだの構造と機能の基本	細胞の構造と細胞膜の生理を学び、細胞の興奮と活動電位、運動単位、筋収縮の概略を理解する。また組織とその働きの基本を理解する。		
	2	からだの構造と機能の基本	細胞の構造と細胞膜の生理を学び、細胞の興奮と活動電位、運動単位、筋収縮の概略を理解する。また組織とその働きの基本を理解する。		
	3	循環	心臓の機能、血液循環、循環系の調節、血圧について理解する。		
	4	血液	血液の作用、血液の成分、血液の凝固、血液型について理解する。		
	5	免疫	白血球と免疫機構について学ぶ。		
	6	呼吸	呼吸調節、呼吸運動、肺気量と換気、血液ガスについて学ぶ。		
	7	嚥下、消化と吸収	消化器系における嚥下機構、消化、吸収の仕組みを知る。栄養の代謝を学ぶ。		
	8	嚥下、消化と吸収	消化器系における嚥下機構、消化、吸収の仕組みを知る。栄養の代謝を学ぶ。		
	9	体液調節と尿排泄	腎臓における体液調節、尿の生成と排泄を理解する。		
	10	生殖	男性生殖器和女性生殖器の働きを学ぶ。個体発生の概略を理解する。		
	11	内分泌	ホルモンの種類と働きを学ぶ。		
	12	感覚	感覚器系（視覚、聴覚、平衡感覚、味覚、嗅覚、皮膚感覚、深部感覚）の働きを学ぶ。		
	13	感覚	感覚器系（視覚、聴覚、平衡感覚、味覚、嗅覚、皮膚感覚、深部感覚）の働きを学ぶ。		
	14	神経	神経細胞の興奮と伝達を理解する。脳の基本構造を理解し、運動の調節に関わる中枢（脊髄、脳幹、小脳、大脳基底核）の概略と末梢の関係を学ぶ。		
	15	神経	睡眠と覚醒、意識について理解しそれらと脳波の関連を知る。記憶と学習の仕組みを理解する。自律神経の作用を理解する。		

[illegible]

授業科目	病理学		担当教員	曾我部 いづみ	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	人体の構造と機能において正常から逸脱する症状・徴候を原因やメカニズムも含めて理解する。				
到達目標	病理学の意義を理解し、全身諸臓器に生じる共通の疾患、病態について理解する。さらに成り立ちから回復の過程までを体系的に説明することができる。				
テキスト・参考図書等	(教) なるほどなっとく！病理学 著：小林正伸 発行所：南山堂				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	定期試験 90% 平常点 (出席状況) 10%		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	10			
履修上の留意事項	毎回配布する資料をもとに解説します。病理学は、身体の正常な構造と機能（解剖・生理学）を理解していることが重要です。大変だとは思いますが、同時進行で学習する解剖・生理学の知識を自分なりに復習しつつ講義に挑んで下さい。確認テストは、内容を忘れないうちに復習のつもりでやりましょう。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	病理学概論：病理学の概要	病理医 Q & 病理検査、病理学概論（病理学の意義、分類、観察方法、疾病とは）について学習する。		
	2	病理病態論：炎症・感染症（1）	炎症とは何か、原因、炎症にかかわる細胞や体液性因子、経時的变化、全身への影響、転帰について学習する。		
	3	病理病態論：炎症・感染症（2）	感染症とは何か、その成立、微生物の感染経路・様式、生体の感染防御機構、主な病原微生物の種類と疾患、炎症の形態による分類について学習する。		
	4	病理病態論：循環障害（1）	概要（体循環と肺循環の復習）と全身性また局所の循環障害（充血、うっ血、浮腫、虚血、出血）の病因や病態について理解する。		
	5	病理病態論：循環障害（2）	局所循環障害（血栓症、塞栓症）の病因や病態、種類について理解する。また、局所循環障害により引き起こされる梗塞についても学習する。		
	6	病理病態論：退行性病変と進行性病変	細胞・組織の障害と適応について、退行性病変（変性、萎縮、細胞死）と進行性病変（肥大、過形成、化生）の病態や分類や疾患等を学習する。		
	7	病理病態論：再生と創傷治癒	再生の定義、再生能による分類を学ぶ。また、細胞・組織の創傷治癒の過程、一次治癒と二次治癒の違い、骨組織における治癒の過程についても学習する。		
	8	病理病態論：代謝障害と疾病	体を構成するタンパク質・アミノ酸、核酸、脂質、糖質、無機質、色素等の代謝異常によって引き起こされる疾患について学習する。		
	9	病理病態論：免疫（1）	免疫の概要、自然免疫と獲得免疫、免疫に関わる因子・細胞を学ぶ。また、免疫の成立について理解し学習する。		
	10	病理病態論：免疫（2）	免疫反応がもたらす傷害・疾患（アレルギー性組織障害、自己免疫疾患や膠原病、免疫不全症候群）について学習する。		
	11	病理病態論：腫瘍	腫瘍の概要、定義、肉眼的形態や特徴、良性腫瘍と悪性腫瘍の特徴、腫瘍の命名と分類、異形成、悪性腫瘍の進展形式等を学習する。		
	12	病理病態論：先天異常（1）	先天異常とは・・・、先天異常の成因、遺伝性疾患（単一遺伝子異常、複合多因子疾患）や染色体異常により生じる疾患について学習する。		
	13	病理病態論：先天異常（2）	奇形とは・・・、奇形の原因、成立時期、催奇形因子、奇形の種類と代表的な疾患について学習する。		

	14	病理病態論：老化	生理的老化と寿命、細胞寿命に関する学説を学ぶ。また、加齢による生理的な変化、加齢に伴い増加する全身性疾患、諸臓器の変化について学習する。
	15	病理病態論：病因論&まとめ	すべての疾患には原因（病因）がある。内因、外因のうち、特に外因について整理し学ぶ。全体を通してのまとめ。

[illegible]

授業科目	臨床実習Ⅰ		担当教員	松山 大輔	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	0 回	時間数
授業目的	臨床における言語聴覚療法を見学し言語聴覚士の職務や役割を理解する。				
到達目標	言語聴覚士の業務や役割、職務について理解する。				
テキスト・参考図書等	特に指定はしない				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験		臨床教育者による評価と学科教員の評価を合わせて評価する。		
	レポート		評価項目（実習施設）		
	小テスト		1. 医療者としての基本的態度の習得 2. ST となるために必要な医学的知識・障害像の理解や職業理解の習得 3. スタッフや患者様とのコミュニケーションスキルの向上		
	提出物		評価項目（学校）		
	その他	100	1. 実習前準備 2. 提出物 3. 実習後の発表 実習施設 70%、学校 30% 200 点満点中 120 点以上を合格とする。		
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1		臨床における言語聴覚士の役割と立場を理解し、数種類の言語聴覚療法を見学及び体験する。 1.積極的に参加する 2.病院施設の業務等について学ぶ 3.記録・報告について学ぶ 4.見学による言語聴覚士の役割と職務の理解 5.職業人としてのルールやマナーを学ぶ		

[illegible]

授業科目	医療倫理		担当教員	尾形 敬次	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数		時間数
授業目的	医療者が如何なる社会的文化的文脈の中で活動し、倫理的問題に出会うかを知り、それへの態度を作ること				
到達目標	医療者に相応しい社会的人格を作ること				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	この科目の性質上、知識だけではなく、むしろ医療者としての心構えが問題となる。そこで、授業時間内のそうした課題の考察結果を成績評価において重要視する。これと知識の確認という意味での期末試験とを総合して最終評価を下す。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物				
	その他	50			
履修上の留意事項	倫理学は知識ではなく心構えを作る学問である、積極的に考えることが望まれる。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	日本の医療保障体制	現代の社会民主主義的な医療保障とそこにある問題を知ること		
	2	危機にある医療保障	国家財政の危機の中での医療保障の現状を知ること		
	3	二つの医療保障体制と健康保険制度の違い	現代の危機を市場に委ねるとさらに危機に陥ることを知ること		
	4	危機の始まりとしての疾病構造の変化	第二次大戦後の日本社会の変遷を知りつつ現情を知ること		
	5	高齢化社会と健康寿命	高齢化社会における社会問題を知ること		
	6	患者の自己決定をめぐる倫理的問題	インフォームドコンセントというアメリカ社会に生まれた習慣を日本に導入した際の諸問題を知ること		
	7	死をめぐる倫理的問題	安楽死、尊厳死を求める人とそれを受容できない日本社会の仕組みとの軋轢を知ること		
	8	科学と倫理	応用科学としての医療科学と臨床実践との間にある軋轢を知ること		

[illegible]

授業科目	生物		担当教員	菅藤 隼人	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	【生物】 ヒトの体についての理解を深めるため、生物一般の知識を得る。				
到達目標	【生物】 DNA から組織までのヒトの体のつくりに加え、生物学の基本的な知識を習得するとともに日常の科学に興味を持つ。				
テキスト・参考図書等	「生物学」 著者名：高畑 雅一ほか 発行所：医学書院				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	59	定期試験および毎回の授業後に行う小テストの評価を行う。		
	レポート				
	小テスト	41			
	提出物				
	その他				
履修上の留意事項	【生物】 授業で分からなかった部分については、先生に積極的に聞くなどして復習をすると定期試験対策になる。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	生物学入門	生物という学問・生物の一様性と多様性		
	2	細胞のつくりと働き	生物の構成要素と細胞内の構造・働き		
	3	生殖と発生	子孫を残す仕組み・生物の発生過程		
	4	遺伝情報	遺伝の法則・遺伝子の構造と細胞内での発現経路		
	5	神経系	生物の様々な神経系とその役割		
	6	生命の維持と調節	代謝によるエネルギー生産・筋肉組織・内分泌系		
	7	生命の起源と進化	進化とは・生命の歴史・ヒトの歴史		
	8	テスト対策	定期テストに向けての準備や生物学についてまとめる		

[illegible]

授業科目	医療英語		担当教員	板東 眞一	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
					30 時間
授業目的	医療に関する語彙と英語表現を用いて活発なコミュニケーションを図るための基本的な資質・能力を育成することを目的とする。				
到達目標	①医療に関する平易な英語で話したり書いたりして発信できる。②医療に関する平易な英文を読んだり聞いたりして理解できる。				
テキスト・参考図書等	(教) Speaking of Nursing (看護系学生のための英語コミュニケーション) 著者 Peter Vincent / Alan Meadows 発行所 南雲堂				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	①試験は学習内容の理解度を評価する。 ②提出物は学習内容に即したライティングの到達度を評価する。 ③その他は授業中のタスク（コミュニケーション活動）の到達度を評価する。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物	15			
	その他	35			
履修上の留意事項	医療の専門職を目指すものとして、真摯で意欲的な学習を期待する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	Unit 1	「be 動詞」「一般動詞」do/does を使った Yes/No 疑問文 What, How, Where を使った質問		
	2	Unit 2	「be 動詞」を使った疑問文とその受け答え 新患情報		
	3	Unit 3	命令 形 診療科、病院内の案内		
	4	Unit 4	時につく前置詞、援助の申し出の動 詞 病室		
	5	Unit 5	節、可算名詞と不可算名詞、量を表す表 現 医療品		
	6	Unit 6	医療表現、症状と問題		
	7	Review Units 1-6	クロスワード（医療語彙、症状）、ボードゲーム		
	8	Unit 7	過去 形 身体の部位、怪我の深刻度		
	9	Unit 8	現在進行形と現在 形 内臓器官		
	10	Unit 9	疑問文と答え方、過去 形 病気や怪我と症状、病歴		
	11	Unit 10	頻度の副詞、助動 詞 薬品、医療器具		
	12	Unit 11	未来系		
	13	Unit 12	未来を表す現在進行形、代名詞		
	14	Review Units 7-12	クロスワード（身体の部位、薬品）、ボードゲーム		
	15	学習のまとめ	振り返り		

[illegible]

授業科目	コミュニケーション論Ⅰ		担当教員	埜瀬 充功	
対象年次・学期			必修・選択区分		単位数
授業形態			授業回数		時間数
授業目的	コミュニケーション論を学ぶことの意義を理解し、職業と関連づけて考えることができる。				
到達目標	医療人としての基本的なコミュニケーション態度を身につける。良好な人間関係を保つためのやり取りの基本を考える。				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70	定期試験 70%と授業への取り組み態度 30%（課題や質問紙による）		
	レポート				
	小テスト				
	提出物				
	その他	30			
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	ガイダンスとコミュニケーション論の必要性	本講義の進め方、取り組み方について理解する。コミュニケーション論を学ぶ必要性について考える。		
	2	基本的な考え方	コミュニケーションの本質、目的、情報共有等について考える。		
	3	コミュニケーションの手法①	コミュニケーションの種類や手段、質問の技法について学ぶ。		
	4	コミュニケーションの手法②	コミュニケーションの種類や手段、質問の技法について学ぶ。		
	5	医療面接①	専門職としての面接の特徴や流れについて理解する。		
	6	医療面接②	専門職としての面接の特徴や流れについて理解する。		
	7	対象者への理解	言語聴覚療法の対象児者の特性について理解する。		
	8	まとめ	基本的用語の理解、講義の振り返りを行い、コミュニケーションの基本を理解する。		

[illegible]

授業科目	社会と文化		担当教員	高橋 文代	
対象年次・学期			必修・選択区分		単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	社会心理学における対人認知の理論やしくみをコミュニケーションに関する基本演習を体験しながら学ぶ。				
到達目標	社会問題・現象を取り上げて、それらを引き起こす大きな要因が人間の心理によるものであることを学ぶ。また、簡単な演習を通して、コミュニケーションの取り方によって、人間の反応やモチベーションなどが変化することを体験を通して理解する。				
テキスト・参考図書等	参考図書： 徹底図解 社会心理学 山岸俊男 監修 発行所：新星出版 社会心理学再入門 ジョアンヌ・R・スミス他編 樋口匡貴他監訳 発行所：新曜社 ヒルガードの心理学 第16版 Edward, E., Smith et.al., 内田一成 監訳 発行所：ブレーン出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70	期末試験と提出物、演習への取り組み態度を総合して評価する。 提出物は課題に対する考察が具体的な事例を取り上げて示されているか、演習課題の取り組み態度は、記録用紙に書かれた内容の到達度によって評価する。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物	30			
	その他				
履修上の留意事項	授業内で数回演習を行うので、講義内容を振り返りながら、積極的に参加すること。それによって、座学の内容を体験的に理解する。進行状況によって、授業内容を変更する場合がある。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	ガイダンスと社会、文化と何かについて	授業内容の説明。人間にとっての文化とは何か？DVD 動画を見ながら考える。		
	2	対人認知と美感	人はどのように相手を認知するのか、また美しさを感じる処理論について学ぶ。		
	3	色彩の心理効果と目的に応じたコミュニケーション方法	色彩による心理現象を学ぶ。相手に心地よく依頼を受けて入れて欲しい、たくさん情報を得たいなど、目的に応じた質問法を学ぶ。		
	4	信頼できる情報とは	世の中に溢れる情報の中で、信頼できる情報の選別基準について学ぶ。		
	5	悪徳商法やカルト事例から学ぶ	ドキュメンタリー動画を視聴し、カルト勧誘の心理的な手法を理解し、被害に巻き込まれないための対策を身につける。		
	6	問題解決と説得の理論	社会心理学における説得理論を理解し、説得の構造について学ぶ。		
	7	社会の中の個人と集団心理～集団になると人の心は変わってしまうのか～	対人認知に重要なアイデンティティは認知的な歪みにもつながること、集団心理の性質を理解し、グループワークに役立つ心理学理論を学ぶ。		
	8	グループワークとレポート課題	同調圧力に屈しない方法、葛藤、動機づけなどグループワークに役立つ心理学理論を理解し、簡単な演習にとり組んで体験的に学ぶ。		

[illegible]

授業科目	実践レクリエーション		担当教員	大楽 敏夫	
対象年次・学期			必修・選択区分		単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	スポーツやレクリエーション活動をとおして自分の意思を伝えたり、相手の気持ちを理解するなど他者とのコミュニケーション能力を養い、そのための具体的な方法を企画・立案する能力を身に着ける。健康を維持するための考えや行動をとおして自分や人々の健康のあり方についての意義と重要性を学ぶ。				
到達目標	自分の考えや思いを主張したり他者の意見を聞き入れたりするなど、スポーツやレクリエーション活動を楽しく前向きに取り組む。またそのような場面を作り上げる方法や能力を養う。				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	・評価方法の三つの観点を総合的に判断し、評価とする。 取り組み状況については（姿勢・頑張り・強調性）など。レポート課題については（内容・提出日厳守・丁寧さ）とする。		
	レポート	30			
	小テスト				
	提出物				
	その他	20			
履修上の留意事項	服装は活動に適した服装とする。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション 教室で実施	履修内容の把握と生徒把握		
	2	1 ニューススポーツ（ボッチャ）	・ボッチャ競技の基礎を学ぶ（器具は札幌市障害者スポーツ協会より借用） ・競技への理解、チーム編成や競技場準備を協力して行う		
	3	1 ニューススポーツ（ボッチャ）	・ボッチャ競技の基礎を学ぶ（器具は札幌市障害者スポーツ協会より借用） ・競技への理解、チーム編成や競技場準備を協力して行う		
	4	2 ニューススポーツ（ボッチャ）	・ボッチャの試合 ・チームを作り試合をする。チーム編成や競技場準備を協力して行う。		
	5	2 ニューススポーツ（ボッチャ）	・ボッチャの試合 ・チームを作り試合をする。チーム編成や競技場準備を協力して行う。		
	6	レクリエーション（1）	各グループがレクリエーションを考え計画から実行までを行う。（計画・実行・評価をレポートにまとめる）		
	7	レクリエーション（1）	各グループがレクリエーションを考え計画から実行までを行う。（計画・実行・評価をレポートにまとめる）		
	8	レクリエーション（2）	各グループがレクリエーションを考え計画から実行までを行う。計画・実行・評価をレポートにまとめる）		
	9	レクリエーション（2）	各グループがレクリエーションを考え計画から実行までを行う。計画・実行・評価をレポートにまとめる）		
	10	実践スポーツ（1）	準備運動・基礎運動（縄跳び・リズムステップ・その他）・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他（練習及び試合）		
	11	実践スポーツ（1）	準備運動・基礎運動（縄跳び・リズムステップ・その他）・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他（練習及び試合）		
	12	実践スポーツ（2）	準備運動・基礎運動（縄跳び・リズムステップ・その他）・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他（練習及び試合）		
	13	実践スポーツ（2）	準備運動・基礎運動（縄跳び・リズムステップ・その他）・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他（練習及び試合）		
	14	実践スポーツ（3）	準備運動・基礎運動（縄跳び・リズムステップ・その他）・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他（練習及び試合）		

	15	実践スポーツ（３）	準備運動・基礎運動（縄跳び・リズムステップ・その他）・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他（練習及び試合）
--	----	-----------	--

[illegible]

授業科目	人間関係論		担当教員	大野 史博	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	本講義の目的は、対人援助職が健康的に働き続けるための人間関係や心理学の知識を学び、患者との関係はもちろん、職場やプライベートの充実を図ることです。職員同士の円滑なコミュニケーションを促進し、チームワークや心理的安全性を高めることで、セルフケアによるストレスの軽減やワークライフバランスの充実を目指します。自身の健康や幸福が向上することで、最終的に患者への支援の質も高まることを目指します。				
到達目標	1. 対人援助職における人間関係の重要性を理解し、職場や日常生活で活かせる心理学的知識を習得する。 2. 職員同士の円滑なコミュニケーションの方法を学び、チームワークや心理的安全性を高める。 3. ストレスマネジメントやセルフケアの手法を身につけ、健康的に働き続けるための基礎を築く。 4. ワークライフバランスの視点を持ち、仕事と私生活の充実が相互に影響し合うことを理解する。 5. 学んだ知識を実践し、職場環境の向上と最終的に患者へのより良い支援につなげる。				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	試験の得点に加えて、出席並びにホームワーク等の提出状況などから総合的に評価する		
	レポート				
	小テスト				
	提出物	30			
	その他	20			
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	人間関係論の基礎と心理学	人間関係の基本構造と心理学的視点を学び、対人理解を深める。		
	2	行動学の視点から人間関係の理解 基礎	人間関係をテーマに心と身体、思考、行動のつながりを学ぶ。		
	3	行動学の視点を人間関係に活かす 実践	集団場面で生じやすい行動の癖とその維持要因について検討する。		
	4	行動分析を人間関係に用いる 応用	自己理解を深めることで、より良い人間関係や適切な行動選択を目指す。		
	5	対人関係の中で生じる思考のとらえ方 基礎	対人場面で生じやすい思考と感情のつながりを理解し、自己理解を深める。		
	6	対人関係の中で生じる思考を柔軟にする 実践	対人場面で生じやすい思考や感情を柔軟にするためのワークなどを実施する。		
	7	コミュニケーションパターンの自己理解	自身の対人パターンを理解し、活かし方を模索する。		
	8	グループワークの実践	グループに分かれて、これまでの学びを実践する。		
	9	SST（ソーシャルスキルズトレーニング）	対人関係のスキル向上を目的とした具体的なトレーニングを行う。		
	10	職場におけるアサーション	適切な自己主張の方法を学び、円滑なコミュニケーションを促進する。		
	11	コンセンサストレーニング	アサーションを用いて実際のディスカッション場面で練習する。		
	12	対人場面で ACT を活用する 基礎	心理的柔軟性を身に付けて、より良い対人関係を築くための準備をする。		
	13	対人場面で ACT を活用する 応用	対人場面で生じる気持ちにどう向かうか、ワークを用いて対処法を学ぶ。		
	14	価値の明確化	価値に基づいた行動を促進し、自分の人生について考える。		
	15	総合グループワーク	これまでの学びを活かして、より良いコミュニケーションで人間関係を構築する。		

[illegible]

授業科目	情報処理		担当教員	松山 大輔	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	医療現場や学会発表ではパソコンでの作業が必須である。本講義では、文章作成、表計算およびスライド作成の基本操作を学ぶ。				
到達目標	Word、Excel および Power Point の基本操作ができる。				
テキスト・参考図書等	(教) テキスト 30 時間でマスター Office2021 (Windows11 対応) (実教出版)				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	60	Word テスト 40% パソコンタイピング 3 級レベル (5 分間で 200 字) 以上		
	レポート		Excel テスト 30% 情報処理技能検定試験 準 2〜4 級レベル相当		
	小テスト		スライド作成 30% Powerpoint を使用してスライドを作成できる		
	提出物	40	以上を総合して評価する。		
	その他				
履修上の留意事項	初心者を中心にフォローしながら進めます。 何度も繰り返し操作して慣れることが大事です。 データ保存のために USB メモリを用意してください。安いもので結構です。USB メモリは、3 年間の実習や国家試験対策で使用します。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション	電源 ON/OFF 等、WebClass・Classroom・Teams の利用		
	2	Word	文字入力、編集、保存、タイピング練習		
	3	Word	文書作成、挿入、その他、文書提出の仕方		
	4	Excel	データ入力、編集、配置、書式、例題提示→沿って操作		
	5	Excel	グラフと図形の作成・編集、文書提出の仕方 (印刷を pdf で)		
	6	Word・Excel テスト			
	7	Powerpoint	文字入力、図形描画、画面切り替え、アニメーション		
	8	Powerpoint	"挿入、見やすさ、発表方法、録画、その他 ※課題 (ST を目指した経緯、これからの目標、どんな ST に?) スライド 5〜10 枚以内、15 回終了までに提出"		
	9	情報セキュリティ・Google フォームの作成			
	10	情報処理	データの種類と尺度水準、記述統計・推測統計		
	11	情報処理	代表値とばらつき、図形の種類		
	12	情報処理	相関・回帰分析・重回帰分析・ロジスティック回帰分析		
	13	情報処理	検定①		
	14	情報処理	検定②		
15	Zoom や Teams、Classroom を用いたグループワーク、ふりかえり				

[illegible]

授業科目	医学総論		担当教員	園田 智子	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	人の健康に影響を与える要因を理解し、乳児から高齢者に至る保健対策や健康水準について学ぶ。				
到達目標	1. どのような生活環境要因が人の健康に影響を及ぼすのか説明できる。 2. 我が国の健康水準を述べることができる。 3. 日本人の生活習慣の現状を知り疾患と関連づけることができる。				
テキスト・参考図書等	(参) わかりやすい公衆衛生学 著者名：清水忠彦 発行所：ヌーヴェルヒロカワ				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	講義終了後、国家試験に準じた定期試験を実施する。 60 点未満者は再試験を受けること。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物				
	その他				
履修上の留意事項	教科書とスライドを使って授業を行う。講義時間内で理解ができるようにすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	疾病の歴史	人類がどのように病気と闘ってきたのか		
	2	人口統計・衛生統計	日本の人口、疾病統計		
	3	健康管理・予防医学（食品、食生活）	日本人の栄養・食生活の現状、食中毒の種類		
	4	健康管理・予防医学（飲酒・喫煙）	飲酒・喫煙が健康に及ぼす影響		
	5	母子保健・学校保健	母子・学校における健康増進と健康診断		
	6	産業保健	職場における健康増進・健康診断、職業病		
	7	環境衛生	地球環境問題、大気汚染、上下水道		
	8	地域保健・地域医療、疫学	保健所・市町村における保健衛生業務、医療機関の種類、疫学（病気の原因を探る手法）		

[illegible]

授業科目	音声言語聴覚医学		担当教員	實川 純人	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数 15 時間
授業目的	正常な言葉の生成とその異常との関係を学び、それらに関連付けて、嚥下障害や音声障害といった病態の理解を深める。 聴覚機能は人間のコミュニケーション能力に深く関わっている。正常聴覚系の構造・機能について基本的なことを学び関連する障害について理解を深める。				
到達目標	・呼吸、発声、発語に必要な器官の構造・機能を学び書けるようになる。 ・発声、摂食嚥下に影響を及ぼす病態について学ぶ。 ・聴覚系の正常構造をかけるようになる。 ・関連する病態について学び、難聴の機序について説明できるようになる。				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う		
	レポート				
	小テスト				
	提出物				
	その他				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	聴覚系の病態と機能	外耳疾患・中耳疾患		
	2	聴覚系の病態と機能	内耳疾患・人工内耳		
	3	聴覚系の病態と機能	耳鳴り・後迷路性・中枢疾患		
	4	聴覚系の病態と機能	総括		
	5	呼吸器系の解剖、生理、診察	鼻腔から肺胞までの構造と機能、生理学、診察		
	6	呼吸機能検査、パルスオキシメーター	肺の機能、評価法について		
	7	誤嚥性肺炎の臨床、嚥下造影	誤嚥性肺炎の機序と治療		
	8	誤嚥性肺炎の予防	誤嚥の予防、肺炎予防、口腔ケア		

[illegible]

授業科目	基礎神経学		担当教員	松村 博文	
対象年次・学期			必修・選択区分		単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	神経系のしくみと機能の理解を深める。				
到達目標	神経細胞とニューロンの構造、末梢神経系と中枢神経系のしくみと機能を学ぶ。				
テキスト・参考図書等	(参) 解剖学で指定された教科書と同じ 言語聴覚士のための解剖・生理学 (医歯薬出版) ナースのための解剖生理ポケットブック (技術評論社) 病気がみえる VOL7 脳・神経 第2版 (医学書院)				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う		
	レポート				
	小テスト				
	提出物				
	その他				
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		

[illegible]

授業科目	生涯発達心理学		担当教員	山縣 豊樹	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	本講義では、発達にかんする研究などを紹介し、ともにこのテーマについて考察することを目的とする。発達とは、「生まれてから大人になるまで」の過程だけでなく、母体に宿ってから死ぬまでの、まさに生涯をつうじた変化であるにとらえることができる。この壮大な変化の過程に、研究の視点からふれてみたい。				
到達目標	発達過程に関する研究知見に触れることで、発達にかかわる諸問題や人間の「こころ」について、自身で考えを深める能力・技術を養う。				
テキスト・参考図書等	【テキスト】なし。 【参考図書】ベーシック発達心理学 著者：開一夫 齋藤慈子 編 発行所：東京大学出版 など（講義内容に沿って、適宜、関連書籍を紹介する予定）。				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	定期試験・小テストを合わせて評価する。		
	レポート				
	小テスト	10			
	提出物				
	その他				
履修上の留意事項	基本的に予習は必要としない。以下に記載した各回の履修内容は、進度等に応じて適宜変更を加える可能性がある。それぞれの講義ごとに内容を覚えようとするだけでなく、全体的な「流れ」をつかむように意識して受講していただきたい。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	【導入】 「生涯発達心理学」とは	本講義のガイダンスを行なうとともに、導入として、生涯発達心理学における基礎的な考え方を概説する。		
	2	【第1部】 生涯発達という発達観、および青年期・成人期・老年期	本講義の中核概念である「生涯発達」について、代表的な理論を紹介しつつ、説明・補足する。続けて、青年期～老年期の変化やその特徴を概観する。		
	3	【第1部】 生涯発達という発達観、および青年期・成人期・老年期	本講義の中核概念である「生涯発達」について、代表的な理論を紹介しつつ、説明・補足する。続けて、青年期～老年期の変化やその特徴を概観する。		
	4	生涯発達心理学を学ぶための基礎	生涯発達心理学を学ぶ上で基礎となる事項（心理学における、遺伝・環境についての議論や、学習の理論、など）を説明・補足する。		
	5	生涯発達心理学を学ぶための基礎	生涯発達心理学を学ぶ上で基礎となる事項（心理学における、遺伝・環境についての議論や、学習の理論、など）を説明・補足する。		
	6	【補足】 生涯発達心理学を学ぶための基礎	生涯発達心理学を学ぶ上で基礎となる事項（心理学における、遺伝・環境についての議論や、学習の理論、など）を説明・補足する。		
	7	【補足】 生涯発達心理学を学ぶための基礎	生涯発達心理学を学ぶ上で基礎となる事項（心理学における、遺伝・環境についての議論や、学習の理論、など）を説明・補足する。		
	8	【第2部】 胎児期・乳幼児期・学童期	胎児期～学童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、言語、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。		
	9	【第2部】 胎児期・乳幼児期・学童期	胎児期～学童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、言語、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。		
	10	【第2部】 胎児期・乳幼児期・学童期	胎児期～学童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、言語、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。		
	11	【第2部】 胎児期・乳幼児期・学童期	胎児期～学童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、言語、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。		
	12	【第2部】 胎児期・乳幼児期・学童期	胎児期～学童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、言語、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。		

	13	【第2部】 胎児期・乳幼児期・学童期	胎児期～学童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、言語、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。
	14	【第2部】 胎児期・乳幼児期・学童期	胎児期～学童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、言語、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。
	15	【まとめ】 振り返りと全体像の俯瞰（、および補足・発展）	各発達期について確認・復習する。必要や状況に応じて、補足的あるいは発展的な内容を扱う。

[illegible]

授業科目	学習・認知心理学		担当教員	槇 洋一	
対象年次・学期	通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数
					45 時間
授業目的	言語聴覚士国家試験の出題範囲である認知心理学についての理解を深め、知識を身につける。言語聴覚士国家試験出題基準にある「学習・認知心理学」の内容範囲を、本科目「学習心理学」と別科目「認知心理学」とで連続的に学ぶ。				
到達目標	認知心理学の研究手法やメカニズムを学ぶことで、心理学における認知心理学の位置づけ、考え方、人の認知の働きについての理解を深める。主に、記憶、思考、言語、対人認知などのメカニズムについて学ぶ。 人間の心的機能には大きく分けて知・情・意の3つの側面がある。その中の知（認知）の側面についての基礎知識を学ぶ。具体的には、感覚、知覚、記憶、学習、思考、言語などの認知機能の特徴と基本的なしくみと緒理論を、脳の構造など生理的な視点を交えながら学ぶ。				
テキスト・参考図書等	教科書：言語聴覚士のための心理学 第2版 山田弘幸 編集 発行所：医歯薬出版 配布資料：授業ごとに配布予定 ヒルガードの心理学 第16版 Edward, E., Smith et.al., 内田一成 監訳 発行所：ブレーン出版 マイヤーズ心理学 著者名：D. マイヤーズ 発行所：西村書店				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	85	(認知心理学) 定期試験の結果(100)で評価を行う。 (学習心理学) 定期試験(70)と提出課題(30)で総合的に評価を行う。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物	15			
その他					
履修上の留意事項	(認知心理学) テキストと配布資料をもとに以下のスケジュールで授業を進めが、全体の進行状態に応じてスケジュール等を変更する場合もある。 (学習心理学) 授業時に配布する資料と教科書をもとに授業を進めます。予習は必要ありませんが、しっかり復習しましょう。また、数回の提出課題があるので必ず提出してください。全体の進行状態に応じてスケジュールを変更する場合があります。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	ガイダンス～前半のガイダンスと心理学の概要～	前半の講義のガイダンス。心理学概要と知覚のプロセスについて学ぶ		
	2	知覚・感覚1～知覚のプロセスと感覚の概要～	多様な感覚の種類とそれらの処理構造のアウトラインを学ぶ		
	3	知覚・感覚2～主感覚のしくみ～	視・聴覚の生理的構造としくみ、知覚の処理論について学ぶ		
	4	知覚・感覚3～心理物理学測定法～	感覚をどのように測るかその主要な実験方法と理論について学ぶ		
	5	感覚・知覚4～知覚の障害と豊かな感性～	DVD視聴を通して知覚の重要性とそれに関わる脳のしくみについて学ぶ		
	6	知覚の使用1～注意・定位・再認～	感覚器で捕らえられた情報がどのように処理されて再認に至るかを学ぶ		
	7	知覚の使用2～抽象化・恒常性と知覚の歪み～	感覚器で捕らえられた情報がどのように処理されて再認に至るかを学ぶ		
	8	記憶1～記憶の障害と脳のしくみ～	DVD視聴を通して記憶の重要性とそれに関わる脳のしくみについて学ぶ		
	9	記憶2～記憶の種類～	DVDの内容を振り返りながら、記憶の種類について実験を交えながら学ぶ		
	10	学習と動機づけ1～観察学習と連合学習～	観察学習と条件づけの基本的な知識を学ぶ		
	11	学習と動機づけ2～発達と動機づけ～	認知発達と動機づけについて学ぶ		
	12	認知心理学とは	心理学の中における認知心理学の位置づけ【ワーク】目標設定や優先順位のマインドを育む		
	13	記憶①	記憶の過程、記憶の処理やモデル		
	14	記憶②	記憶の過程、記憶の処理やモデル		
15	記憶③	知識、スキーマ理論、メタ認知			

	16	記憶④	忘却のメカニズム
	17	記憶⑤	記憶の誤り，記憶の歪み
	18	思考と知識	思考の仕組み，問題解決と推論
	19	言語①	乳幼児期の言語獲得，概念形成
	20	言語②	様々な言語コミュニケーション（言語の使用と理解）
	21	認知と感情	感情と認知との表出・関係
	22	対人認知①	印象形成，認知的不協和，認知バイアス
	23	対人認知②	対人魅力

[illegible]

授業科目	音声学		担当教員	山田 敦士	
対象年次・学期	通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数
					45 時間
授業目的	一般音声学に関する知識、分析方法を教授する				
到達目標	一般音声学に関する知識を身につけ、日本語音声に対する考察ができるようになる				
テキスト・参考図書等	大森孝一ほか編（2018）『言語聴覚士テキスト第4版』医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	期末試験（前後期各1回）および授業中の小テスト（数回）により評価する。		
	レポート				
	小テスト	20			
	提出物				
	その他				
履修上の留意事項	授業進行状況によって内容変更がありえる。配布資料も併用。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	ガイダンス	音声学の射程を知る		
	2	音声学の位置づけ	音声学と音韻論		
	3	音声の分類（1）	調音器官		
	4	音声の分類（2）	調音運動の観察		
	5	音声の分類（3）	IPA		
	6	音声の分類（4）	母音と子音		
	7	音声の分類（5）	子音の分類		
	8	音声の分類（6）	母音の分類		
	9	まとめと復習（1）	コース前半の復習		
	10	音の結びつき（1）	音節		
	11	音の結びつき（2）	調音結合と同化、音位転換		
	12	音表文字と音声表記	音と文字の関係		
	13	超分節的要素（1）	イントネーション		
	14	超分節的要素（2）	アクセント		
	15	超分節的要素（3）	リズム		
	16	音韻論（1）	弁別素性		
	17	音韻論（2）	音韻規則		
	18	音韻論（3）	音節とモーラ		
	19	日本語の音声（1）	日本語の音素体系、モーラ音素		
	20	日本語の音声（2）	日本語の母音音声		
	21	日本語の音声（3）	日本語の子音音声		
	22	日本語の音声（4）	アクセント		
	23	まとめと復習（2）	コース後半の復習		

[illegible]

授業科目	リハビリテーション入門		担当教員	阿部 由美	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必須	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	リハビリテーションと障害に関する理論を理解し、実際の教育・医療・福祉現場、および地域におけるリハビリテーションの進め方を学ぶ				
到達目標	教育・医療・福祉現場、および地域におけるリハビリテーションの役割、言語聴覚士の役割を理解する				
テキスト・参考図書等	(教) P T ・ O T ・ S T ・ ナースを目指す人のためのリハビリテーション総論 改訂第 4 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験、小テスト,提出物にて評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	10			
	提出物	10			
	その他	0			
履修上の留意事項	言語聴覚療法はリハビリテーションの一領域である。リハビリテーションの概論に基づいてグローバルな視点で言語聴覚療法を組み立てる重要性について学ぶ				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	リハビリテーションと機能訓練の違い	リハビリテーションの歴史・定義・目的について		
	2	医療・保健・社会福祉とリハビリテーションの関わり方	リハビリテーションの領域		
	3	リハビリテーションマインド	障害を診る心		
	4	疾患と障害の関係	I C I D H と I C F (特に I C I D H について)		
	5	疾患と障害の関係	I C I D H と I C F (特に I C F について)		
	6	疾患と障害の関係	I C I D H と I C F (特に I C F について)		
	7	リハビリテーションの過程	リハビリテーションの領域		
	8	リハビリテーションの過程	評価に基づくプログラム立案を概観		
	9	リハビリテーションの過程	事例を通して I C I D H を具体的に考える		
	10	リハビリテーションの過程	事例をと通して I C F を具体的に考える		
	11	リハビリテーションの過程	事例をと通して I C F を具体的に考える		
	12	医学的リハビリテーションの各段階	疾患別リハビリテーションの実際 (主に急性期)		
	13	医学的リハビリテーションの各段階	疾患別リハビリテーションの実際 (主に回復期)		
	14	医学的リハビリテーションの各段階	疾患別リハビリテーションの実際 (主に生活期)		
	15	言語聴覚士のリハビリテーション	集団コミュニケーション療法について		

[illegible]

授業科目	言語聴覚障害総論Ⅰ		担当教員	北風 祐子	
対象年次・学期			必修・選択区分		単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	言語聴覚士の仕事について理解をし、言語聴覚障害、言語聴覚療法の基本となる種々の知識や原則を学ぶ				
到達目標	・言語聴覚士の仕事について理解できる ・様々な言語聴覚障害の全体像について把握できる・言語聴覚士の資質について考えることができる				
テキスト・参考図書等	(教) クリア言語聴覚療法 1 言語聴覚障害総論 建帛社 (参) 病気がみえる vol.7 脳・神経 第2版 (参) 言語聴覚士テキスト 第4版 医歯薬出版株式会社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う		
	レポート				
	小テスト				
	提出物				
	その他				
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション	この科目の目的、学習の仕方について理解する		
	2	言語聴覚士の仕事	言語聴覚士の歴史、定義、資質等を学ぶ		
	3	言語聴覚障害の概要①	コミュニケーションの過程や方法、ことばにまつわる基本的知識を学ぶ。 また、言語聴覚士が対象とすることばの障害について理解する。		
	4	言語聴覚障害の概要②	コミュニケーションの過程や方法、ことばにまつわる基本的知識を学ぶ。 また、言語聴覚士が対象とすることばの障害について理解する。		
	5	言語聴覚障害の概要③	コミュニケーションの過程や方法、ことばにまつわる基本的知識を学ぶ。 また、言語聴覚士が対象とすることばの障害について理解する。		
	6	言語聴覚療法の評価①	評価の基本的概念、基本的な評価方法、実施上の留意点を理解する。		
	7	言語聴覚療法の評価②	評価の基本的概念、基本的な評価方法、実施上の留意点を理解する。		
	8	言語聴覚療法の評価③	評価の基本的概念、基本的な評価方法、実施上の留意点を理解する。		
	9	言語聴覚士の職業倫理	職業倫理の原則、や倫理的実践等について学ぶ。		
	10	言語聴覚士の業務上の留意事項	リスクマネジメント、感染対策、守秘義務、ハラスメント等について学ぶ。		
	11	研究・報告の技術①	報告や研究の目的を知り、その基本的知識、手法を理解する。		
	12	研究・報告の技術②	報告や研究の目的を知り、その基本的知識、手法を理解する。		
	13	研究・報告の技術③	報告や研究の目的を知り、その基本的知識、手法を理解する。		
	14	言語聴覚士の社会的活動	言語聴覚士の社会的活動の領域を理解し、その意義と役割について考える。		
	15	まとめ	要点の振り返りと専門用語の確認を行い、学びの定着を図る。		

[illegible]

授業科目	失語症Ⅰ		担当教員	高倉 祐樹	
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数
授業目的	失語症についての定義、知識を習得し、失語症古典的分類におけるそれぞれの特徴を把握し鑑別する。				
到達目標	・脳の基本構造と言語中枢について理解する ・失語症の原因疾患と症状について理解する ・失語症の定義について説明できる ・失語症の各タイプの特徴を説明できる				
テキスト・参考図書等	(教) 失語症臨床標準テキスト 医歯薬出版株式会社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験で評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	古典的失語症分類においてグループワークを実施します。積極的に参加して確実な知識を身につけること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション	失語症の定義、失語症研究の歴史、原因疾患、病巣について学び、失語症という障害を概観する		
	2	失語症とは何かを知る	失語症の定義、失語症研究の歴史、原因疾患、病巣について学び、失語症という障害を概観する		
	3	失語症状①聴覚的理解の症状	聴覚的理解の症状として出現する、語音認知、語の意味理解、構文の理解、聴覚的把持力について学ぶ。		
	4	失語症状①聴覚的理解の症状	聴覚的理解の症状として出現する、語音認知、語の意味理解、構文の理解、聴覚的把持力について学ぶ。		
	5	失語症状②発話面の症状・復唱の症状	喚語困難、迂言、保続、錯語、ジャルゴン、構文の障害、再帰性発話、発語失行（失構音）、非流暢などの症状について学ぶ。復唱については、聴覚認知－把持・処理－発話のステップを含む復唱の障害機序を学ぶ。		
	6	失語症状②発話面の症状・復唱の症状	喚語困難、迂言、保続、錯語、ジャルゴン、構文の障害、再帰性発話、発語失行（失構音）、非流暢などの症状について学ぶ。復唱については、聴覚認知－把持・処理－発話のステップを含む復唱の障害機序を学ぶ。		
	7	失語症状③読み書きの症状	仮名と漢字の違い、音読と読解の違い、錯読、自発書字と書き取りの違い、錯書などについて学ぶ。		
	8	失語症状④その他の症状	数字と計算の障害もよく観察される。また、無言、保続、反復言語、視野障害など失語症に随伴しやすい症状について学ぶ。		
	9	失語症のタイプ分類	失語症のタイプ分類をめぐる歴史について概観し、それぞれの失語症について理解する。		
	10	失語症のタイプ分類	失語症のタイプ分類をめぐる歴史について概観し、それぞれの失語症について理解する。		
	11	失語症の評価	失語症の臨床において使用される各種検査について、その対象・目的や解釈について学ぶ。		
	12	失語症の評価	失語症の臨床において使用される各種検査について、その対象・目的や解釈について学ぶ。		
	13	失語症状の症例について検討する	症例を通して、失語症状やタイプを理解する		
	14	失語症状の症例について検討する	症例を通して、失語症状やタイプを理解する		
15	まとめ				

[illegible]

授業科目	失語症演習		担当教員	阿部 由美	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	言語聴覚療法の基本的な考え方・情報収集と評価の診断の技法を習得する。				
到達目標	標準失語症検査（S L T A）の評価手技を習得する				
テキスト・参考図書等	適宜、資料を配布。（参）言語聴覚療法 臨床マニュアル 改訂第 3 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験（筆記／実技）80%、小テスト 10%、提出物 10%にて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	10			
	提出物	10			
	その他	0			
履修上の留意事項	1 回でも欠席すると検査の実施方法がわからなくなります。更に、講義後の復習（検査練習）は必須です。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	成人言語聴覚療法とは	標準失語症検査（SLTA）について		
	2	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	3	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	4	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	5	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	6	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	7	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	8	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	9	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	10	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	11	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	12	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	13	SLTA 報告書	結果の分析、基本的な文章の組み立て方		
	14	SLTA 報告書	結果の分析、基本的な文章の組み立て方		
15	SLTA 報告書	結果の分析、基本的な文章の組み立て方			

[illegible]

授業科目	高次脳機能障害学		担当教員	松山 大輔	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	高次脳機能障害について各症状とその発生メカニズム、評価、リハビリテーションについて基本的な知識を学ぶ				
到達目標	・各種高次脳機能障害について理解および説明ができる ・各種高次脳機能の病巣を理解および説明ができる				
テキスト・参考図書等	(教) 高次脳機能障害学 第3版 著者：石合純夫 発行所：医歯薬出版 (教) 高次脳機能障害ポケットマニュアル 第3版 著者名：原寛美 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	高次脳機能障害は「見えない障害」と呼ばれ、障害は多岐にわたる。毎回しっかり復習すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	高次脳機能障害とは	高次脳機能障害の概要について学ぶ		
	2	失行	失行のタイプやメカニズムについて学ぶ		
	3	失行	失行のタイプやメカニズムについて学ぶ		
	4	失認	失認のタイプやメカニズムについて学ぶ		
	5	半盲と半側空間無視	半盲と半側空間無視の違いやメカニズムについて学ぶ		
	6	記憶障害	記憶の種類とその障害、メカニズムについて学ぶ		
	7	記憶障害	記憶の種類とその障害、メカニズムについて学ぶ		
	8	注意障害	注意機能とは何か、注意障害でどのような症状を呈するのかについて学ぶ		
	9	注意障害	注意機能とは何か、注意障害でどのような症状を呈するのかについて学ぶ		
	10	遂行機能障害	遂行機能とは何か、遂行機能障害でどのような症状を呈するのかについて学ぶ		
	11	認知症	認知症のタイプやメカニズム、中核症状と行動心理症状について学ぶ		
	12	認知症	認知症のタイプやメカニズム、中核症状と行動心理症状について学ぶ		
	13	外傷性高次脳機能障害	外傷性高次脳機能障害の特徴、問題点、リハビリや社会資源について学ぶ		
	14	脳の部位からみた高次脳機能障害	各症状と脳の機能との関係を復習する		
15	事例検討・ふりかえり	事例を通して高次脳機能障害の症状をとらえ、リハビリテーションについて学ぶ			

[illegible]

授業科目	言語発達障害概論	担当教員	小屋 雄二		
対象年次・学期	1 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	言語発達障害について、その要因としての各障害の概要を学ぶ。				
到達目標	ことばは、周囲の人・物・音・光など環境からの刺激を受け、聴覚や視覚などの感覚器、発声言語の運動機能、脳機能などが年齢とともに成熟することにより発達してくるものである。したがって、子どもの側にその成熟を遅らせる要因、すなわち発達障害があれば、言語発達は遅れてしまう。又、それらの機能の成熟を促すための環境に問題があっても、言語発達は遅れてしまう。この授業では、標準的な言語発達を基盤として、それに基づく各障害を理解するための基礎を学ぶことを目標としている。				
テキスト・参考図書等	(教)「言語聴覚士テキスト 第4版」 著者名：大森孝一 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	95	左記の評価割合で総合評価を行う。 他者を気にせず、質問を通してより授業が深化する方向で授業に臨むこと。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物				
	その他	5			
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	言語発達障害とは	自己紹介、言語発達の阻害要因		
	2	発達とは	言語、発達、言語発達、障害、言語発達障害		
	3	発達の生理学	神経系の発達		
	4	発達の病理学	発生異常、周産期異常		
	5	基本情報の収集	情報収集の方法（行動観察、面接法）		
	6	早期発見・早期療育(1)	乳幼児健康診査・母子健康手帳		
	7	早期発見・早期療育(2)	スクリーニング検査（ことばのテスト絵本）演習		
	8	知的能力障害(1)	症状と定義		
	9	知的能力障害(2)	癲癇とその対応		
	10	自閉症スペクトラム障害（1）	症状と定義		
	11	自閉症スペクトラム障害（2）	武蔵野東学園の教育		
	12	脳性麻痺	症状と定義		
	13	限局性学習障害（1）	症状と定義、ディスレクシア		
	14	限局性学習障害（2）	CARD 演習		
	15	注意欠如・多動性障害、療育支援	ADHD の症状と定義、地域支援・家族支援について		

[illegible]

授業科目	小児言語・コミュニケーション障害Ⅰ		担当教員	佐々木 勇輝	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	知的能力障害・特異的言語発達障害（言語症）について学ぶ。子どもに関わる言語聴覚士のイメージを掴む。				
到達目標	① 知的能力障害とは何か、歴史、定義、原因、発達特性について概観する。 ② 知的能力障害児の言語・コミュニケーションの特徴について理解する。 ③ 知的能力障害児の評価、指導の仕方について理解する。 ④ 特異的言語発達障害の定義、判定基準、評価方法、支援方法について理解する。				
テキスト・参考図書等	（教）標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第4版 著者名：藤田郁代 発行所：医学書院				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	定期試験と小テストを合わせて評価する。		
	レポート				
	小テスト	10			
	提出物				
	その他				
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	知的能力障害とは	歴史、定義、原因		
	2	正常発達について	言語・社会性・コミュニケーション・運動発達		
	3	知的能力障害児の特徴	言語発達の過程、認知及び象徴機能の遅れ		
	4	知的障害の原因	出生前のスクリーニング検査、染色体異常等		
	5	ビデオ鑑賞	アイアムサム鑑賞		
	6	知的能力障害の評価	生育歴などの情報収集、インテークシートの書き方、知能検査について		
	7	知的能力障害児の支援	指導・支援を考える上でのポイント		
	8	知的能力障害児の支援	家族支援（ファミリー中心アプローチ、母子臨床、ペアレントトレーニング）		
	9	知的能力障害児の支援	インリアルアプローチやAAC、SST の活用		
	10	知的能力障害児の支援	個別指導とグループ指導、マトリックス法やS-S 法、プレイセラピー等		
	11	知的能力障害児の支援	乳幼児期の支援（乳幼児健診と療育システム）、学童期の支援（特別支援教育、インクルーシブ教育）、療育手帳について		
	12	特異的言語発達障害	定義や言語症について		
	13	特異的言語発達障害	LT との関連について、言語・コミュニケーションの特徴		
	14	特異的言語発達障害	評価と支援		
	15	国家試験	国家試験問題を解く		

[illegible]

授業科目	子どもの障害の援助技術Ⅰ		担当教員	箭本 尚子	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
					30 時間
授業目的	それぞれの検査の概要、評価、解釈について学ぶ。代表的な検査について、演習を通じて基本的な手技を獲得する。				
到達目標	①各種検査の目的・内容を知り、子どもの発達状況に合わせた検査を選択することができる。 ②検査方法を習得し、検査結果をまとめることができる。				
テキスト・参考図書等	授業の際に資料を配布します。				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験、提出物、演習の参加態度を合わせて評価する。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物	10			
	その他	10			
履修上の留意事項	・欠席せず、復習をすること。 ・演習時は私語を慎み、周囲の人に迷惑をかけないようにすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	知能検査と発達検査の概要	評価の目的と方法		
	2	発達検査	新版 K 式発達検査（概要、実施手順）		
	3	発達検査	新版 K 式発達検査（演習①）		
	4	発達検査	新版 K 式発達検査（演習②）		
	5	発達検査	新版 K 式発達検査（評価、解釈①）		
	6	発達検査	新版 K 式発達検査（評価、解釈②）		
	7	知能検査	DN-CAS 認知評価システム（概要、評価、解釈）		
	8	知能検査	日本版 KABC-II（概要、評価、解釈）		
	9	知能検査	WISC-V（概要、実施手順）		
	10	知能検査	WISC-V（演習①）		
	11	知能検査	WISC-V（演習②）		
	12	知能検査	WISC-V（評価、解釈①）		
	13	知能検査	WISC-V（評価、解釈②）		
	14	知能検査	WPPSI-III（概要、評価、解釈）		
	15	まとめ	まとめ		

[illegible]

授業科目	運動障害性構音障害		担当教員	阿部 由美	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	運動障害性構音障害のタイプ分類や発生機序を学ぶ。また、タイプ別の発話特徴を理解する。				
到達目標	運動障害性構音障害の発生機序を理解する。タイプ分類ができる。				
テキスト・参考図書等	言語聴覚士のための運動障害性構音障害				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験 80%、小テスト 20%		
	レポート	0			
	小テスト	20			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	運動性構音障害とは	構音障害と高次脳機能障害		
	2	運動性構音障害とは	定義と種類 S T の役割		
	3	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造（呼吸器系）		
	4	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造（呼吸器系）		
	5	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造（喉頭）		
	6	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造（喉頭）		
	7	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造（付属管腔）		
	8	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造（付属管腔）		
	9	ことばの産生と仕組み	ことばの神経機構		
	10	運動性構音障害の病態	運動性構音障害の分類		
	11	Dysarthria の原因疾患	錐体路、錐体外路、小脳、脳血管疾患、変性疾患		
	12	Dysarthria の原因疾患	錐体路、錐体外路、小脳、脳血管疾患、変性疾患		
	13	タイプ分類と疾患	痙性構音障害、弛緩性構音障害、失調性構音障害、運動低下性／過多性構音障害、混合性構音障害		
	14	タイプ分類と疾患	痙性構音障害、弛緩性構音障害、失調性構音障害、運動低下性／過多性構音障害、混合性構音障害		
15	タイプ分類と疾患	痙性構音障害、弛緩性構音障害、失調性構音障害、運動低下性／過多性構音障害、混合性構音障害			

[illegible]

授業科目	摂食嚥下障害		担当教員	松山 大輔	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	摂食嚥下障害に関する基本的概念を学ぶ。基礎知識や理論を学び、理解する				
到達目標	・ 摂食嚥下に関与する神経、筋を含む構造を理解できる ・ 摂食嚥下モデルを説明できる ・ 摂食嚥下障害の原因疾患や病態を説明できる				
テキスト・参考図書等	"（教）最新 言語聴覚学講座 摂食嚥下障害学 編著：倉知雅子 発行所：医歯薬出版 （教）嚥下障害ポケットマニュアル 第4版 著者名：聖隷嚥下チーム 発行所：医歯薬出版"				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験と小テストの結果から評価する		
	レポート				
	小テスト	20			
	提出物				
	その他				
履修上の留意事項	"・ 配布プリントおよび教科書の予習復習をすること ・ アクティブラーニングの一環としてグループワークを取り入れる。積極的に参加すること"				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション、摂食嚥下器官の解剖			
	2	嚥下の神経機構	筋肉と神経		
	3	咀嚼と嚥下、呼吸の関係	嚥下性無呼吸		
	4	摂食嚥下の生理と嚥下モデル			
	5	摂食嚥下の年齢的变化	喉頭下垂		
	6	摂食嚥下障害とは			
	7	脳血管障害に伴う摂食嚥下障害	各種疾患による違い		
	8	神経筋疾患に伴う摂食嚥下障害	各種疾患による違い		
	9	頭頸部腫瘍に伴う摂食嚥下障害	各種疾患による違い		
	10	認知症に伴う摂食嚥下障害	各種疾患による違い		
	11	サルコペニアに伴う摂食嚥下障害	各種疾患による違い		
	12	精神疾患、呼吸器疾患の摂食嚥下障害	各種疾患による違い		
	13	栄養とその管理			
	14	倫理観、多職種連携	倫理 4 原則		
15	摂食嚥下障害～ST として～				

授業科目	摂食嚥下障害	担当 教員 実務 経験	松山 大輔	道内急性・回復期病院で言語聴覚士として5年間勤務
対象年次・学期	1年・後期	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	聴覚障害学Ⅰ		担当教員	佐々木 勇輝	
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分		単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	「きこえる」とはどういうことかを考え、成人聴覚障害を対象とした臨床活動について理解を深める。				
到達目標	"・聴覚系の構造を学ぶ。 ・聴覚障害について理解し、その種類と特性に応じた検査・評価・訓練の基礎を学ぶ。 ・聴覚障害者のコミュニケーション指導・支援方法を理解する。"				
テキスト・参考図書等	(教) 聴覚障害学 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	定期試験と小テストで評価する。		
	レポート				
	小テスト	10			
	提出物				
	その他				
履修上の留意事項	欠席せず、教科書および授業で配布された資料、授業のメモに基づき理解を深めること。 授業で実施する国家試験形式問題に慣れること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	聴覚障害とは・外耳について	オリエンテーション、聴覚とは何か、外耳の解剖と機能		
	2	聴覚系の構造を学ぶ	中耳の解剖と機能		
	3	聴覚系の構造を学ぶ	感音系（内耳）・聴覚伝導路の構造と機能		
	4	難聴の分類	伝音難聴、感音難聴、混合難聴		
	5	難聴と併発する症状	めまい、耳鳴、聴覚過敏、耳閉塞感、補充現象		
	6	難聴の原因疾患	難聴の原因と発症時期		
	7	成人聴覚障害	老人性難聴、後天的聴覚障害		
	8	聴覚検査の概要①	自覚的聴覚検査		
	9	聴覚検査の概要②	他覚的聴覚検査		
	10	聴覚検査の概要③	乳幼児聴力検査		
	11	聴覚補償機器	補聴器、人工聴覚機器、補助援助システム		
	12	成人聴覚障害のリハビリテーション①	成人聴覚障害の評価と訓練		
	13	成人聴覚障害のリハビリテーション②	コミュニケーション指導		
	14	特異的な聴覚障害	一側性難聴・ANSD・APD・機能性難聴		
	15	国家試験問題	国家試験問題を解けるようになる		

[illegible]

授業科目	言語聴覚障害概論Ⅰ		担当教員	松山 大輔	
対象年次・学期			必修・選択区分		単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	言語聴覚療士の仕事内容、考え方を知り、言語聴覚士とは何かを理解する。				
到達目標	医療従事者としての心構えを理解できる。 言語聴覚士がどのような仕事なのかを知り、言語聴覚士として働く自分をイメージすることができる。 国家試験を受験するイメージすることができる。				
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士テキスト 第4版 医歯薬出版株式会社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験		標本館見学でのレポート、授業内での模擬試験、グループワークでの提出物で評価する。		
	レポート	20			
	小テスト	40			
	提出物	40			
	その他				
履修上の留意事項	「言語聴覚士」・「医療人」としての仕事を深く理解するための重要な科目なので意欲をもって参加すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	標本館見学	標本館見学を通して、医療人としての自覚・責任感を持ち、今後の学習への動機づけを行う。		
	2	先輩言語聴覚士の話（急性期、回復期病院）	言語聴覚士の仕事について知る。具体的に病院で働く意識を持つ。		
	3	先輩言語聴覚士の話（生活期病院、訪問等）	言語聴覚士の仕事について知る。具体的に病院で働く意識を持つ。		
	4	理学療法士の仕事	理学療法士の仕事を知る。言語聴覚士との関係について知る。		
	5	作業療法士の仕事	作業療法士の仕事を知る。言語聴覚士との関係について知る。		
	6	他職種連携（PT, OT, MSW, Ns, DT, PH 等）の理解	グループワークで多職種を理解し、言語聴覚士との関係を知る。		
	7	他職種連携（PT, OT, MSW, Ns, DT, PH 等）の理解	前回グループワークで作成した内容を発表し合うことで多職種連携の理解を深める。		
	8	医療者としての心構え	良き医療者・社会人としての心構え、基本姿勢、ふるまい方を学ぶ。 実習場面や臨床への応用を目指したロールプレイを行う。		
	9	医療者としての心構え	良き医療者・社会人としての心構え、基本姿勢、ふるまい方を学ぶ。 実習場面や臨床への応用を目指したロールプレイを行う。		
	10	臨床実習に向けて～デイレートノートの書き方～	臨床実習に必要な技能を身につける		
	11	臨床実習に向けて～情報収集・報告書/礼状の書き方～	臨床実習に必要な技能を身につける		
	12	国試対策	1 年次から既習範囲の国試問題に触れる。		
	13	国試対策	グループワークで問題を解くことで仲間同士での理解を深める。		
	14	国試対策	グループワークで問題を解くことで仲間同士での理解を深める。		
	15	模擬試験	再試験を小テストとして実施し、理解を深める。		

[illegible]